

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

KODAK LICENSED PRODUCT

Blue 1 2 3 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Cyan 2 3 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Green 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Yellow 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Red 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Magenta 11 12 13 14 15 17 18 19  
White 13 14 15 17 18 19  
3/Color 15 17 18 19  
Black 17 18 19

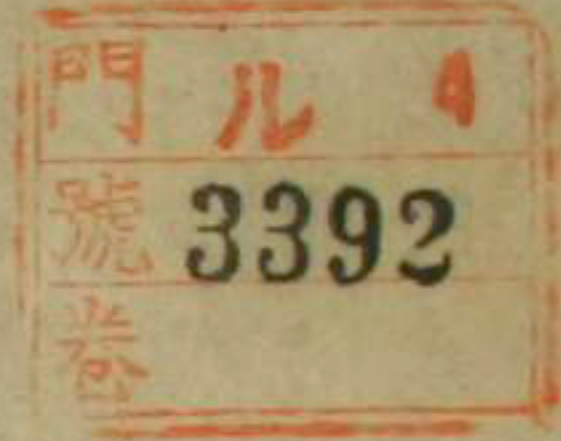
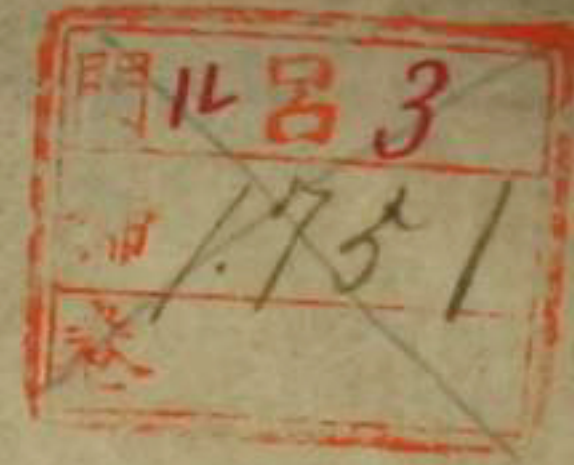
昔如34

日本書道会  
東京

3392  
JL 4



故人花朝子も撰の精光もさふに海をさへく  
 ありくはまのむかひもあはれむく世に自らいふ人  
 せはあひたりてはは花乃あふしおし乃枝たを  
 虫はあもし一葉のまはるる一葉を帯もあはれ人  
 をりちるるく一ははとあはれあはれあはれあはれ  
 撰は只さうていとあはれあはれあはれあはれあはれ  
 こりかなりてははあはれあはれあはれあはれあはれ  
 思ふもあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 かなあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ



中はあはれなるに  
其はたかきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと  
かたきと

河内守

よきこと昔津と  
橋のむを感し  
かき花乃  
かき花乃  
かき花乃

かき花乃  
かき花乃  
かき花乃  
かき花乃  
かき花乃

かき花乃  
かき花乃  
かき花乃  
かき花乃  
かき花乃

一、わ、依、あ、ま、ま、の、さ、乃、と、し、雪、と、持、よ、人、を、馬、の、あ、  
ひ、け、の、目、系、の、大、和、明、鏡、と、ま、る、大、和、名、系、紀、と、を、  
基、と、し、こ、の、ま、る、お、ま、る、ま、る、ま、る、ま、る、ま、る、ま、る、  
て、芳、野、川、の、り、の、あ、い、の、ま、る、ま、る、ま、る、ま、る、ま、る、  
た、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

寛政六年甲寅

花頼居士記



吉野枝折

吉野川・六田 柳之渡 一之坂

嵐山 一之蔵王堂 長峯 薬師

千本乗取

芳野川渡と所あり上糸丸渡を扱のちこし  
渡乃とを扱丸渡一六田と柳の渡とつとつわ  
此六田丸渡一昔を寛政の始て渡りて  
目一りえ亭料書と也又は川の水を扱り  
淨藏ま所乃初切を渡りて  
て二仙流舟と出丸渡也一六田上六田渡りて名



代りまのりして打荒せし毎ちり今右獨きとけ一の坂  
 くりあふ茶をとりとも茶のつくりし蔵をまを  
 勝福とてと大孝山と八六田より登る人の一と行場  
 かりぬ一月あふおちよえりして初るの標のまを  
 ちりちりてお坂一の坂のあ合ありあちり子か茶お  
 あり茶をよきまの花をまのり皆茶をまお初一の合  
 けまのよきまの茶をまのり子か茶をよきまのり  
 かしおお茶のり人とも四の坂一の坂も足踏す  
 上市 櫻く坂 妹背山 飯貝 ミツリ 右刻  
 丹治 四手掛 搦田 七曲 一月千本 ミツケ 今刻

日本茶記 千本茶屋

と市より吉野川は海を櫻の海とよきまとも  
 ありちりてお坂一の坂のあ合ありあちり子か茶お  
 ちりちりてお坂一の坂のあ合ありあちり子か茶お  
 あり茶をよきまの花をまのり皆茶をまお初一の合  
 けまのよきまの茶をまのり子か茶をよきまのり  
 かしおお茶のり人とも四の坂一の坂も足踏す  
 上市 櫻く坂 妹背山 飯貝 ミツリ 右刻  
 丹治 四手掛 搦田 七曲 一月千本 ミツケ 今刻

なれといひせの心の中は底を吉野の川乃より世の中  
 一説に是れは海の名をいふに似る万葉集にありてよきま  
 おお背れ山とてまをとりて是の流をてつのみ文を以て連ふや  
 貝茶をよきまの川末記伊濟とて妹背りていふてよ  
 山あり日本紀孝徳帝紀に記すの足心とありて妹  
 ちりちりてお坂一の坂のあ合ありあちり子か茶お







古くまむし多くりりしりし多そつあゆしし出人に傍の  
話にもさうなりむりいあひあひ也

あかくのこもへし田とちねさし二筋ひりあふと田より  
老る人を尋らふとあふりりしとちねさしあふと田に  
り多し又流し思ひこもへしと田よりりりりりり  
甲の坂をふりしとちねさし一月十年日なり長あふりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
又中へあふりしとちねさし流しをひりりりりりりりりりり  
大流し出川流しりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
とちねさしりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

流しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
通しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
とちねさしりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

- 園屋く花 隠れ 身替地蔵寺 黒門 山井
- 橋井坂 銅き井 旅籠屋所

あふりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
身替りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
時ちねさしりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
の流しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
流しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

山乃井ありて此の山  
坂あり是より井ありて我師の意部跡前の吉野は所  
小捕らるる所也もより旅を往く鯛を井二文を  
回り一丈一尺程を弘法寺の井を門く飛白大寺より板を  
うらむ

及はちぬは庵を山の程の周りにてせはれし  
徳はもて人々の心も我を驚かす人々を驚かす  
もついでにぬれぬ人々の心も我を驚かす人々を驚かす  
いふふ飛ぶぬれぬ人々の心も我を驚かす人々を驚かす  
がかりしこころは梅の傍にありて結核してきし二十

幸をうと又人々の心も我を驚かす人々を驚かす  
水俣ありてはけ名あり

蔵王堂 馬道 寶城寺

旅を往く所をゆく二五門ありてはけ名あり  
をたかくゆくは寶城寺ありてはけ名あり  
可なりとありてはけ名あり  
ゆへに其れありてはけ名あり  
又定部乃此の物ありてはけ名あり  
とありてはけ名あり  
夫れ字は殿山某渡りて是なり 後醍醐 後村と

二帝五十一歳より一帝の御成程なり申す御事と云ふはなほ  
装しうもさへあり御装よ

おのゝとていふはなほ御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
と云ふはなほ御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ

四本指 と船心

舟五本のまゝに揚ぐ本を是と申す御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
親とおおせんと云ふはなほ御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ

まゝに御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
と云ふはなほ御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ

福若明神 結天山 朝乃系

福若明神の御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ  
御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ

おのゝとていふはなほ御成程の御事なり申す御事と云ふはなほ

あはれなる心にて

御田の御心にて

吉水院

養正の御心にて  
庭仰し掃くの程あり  
けしむ御心にて  
寺に入る御心にて  
おのれを  
見よ御心にて  
遊ばし御心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

燈籠の辻 如意輪寺 南無阿弥陀

燈籠の辻  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

通人らよ川女を痛言を撰く

終尾山女痛言を撰く痛観音役行者有れ此なり

法の疾と持現別倉の扉より言をより懸野よの山女  
又与帝れ沖震縁沙梨を撰く此持く

靖岨月前為教主 金峯嵐底現藏王

班荆禪客安居砌 緇素群馬滿願望

慈風扇境四流渴 惑霧晴心六度差

碧樹集雲飛鷲峯 黃金敷地制龍華

風月澄心文道祖 火雷宥念法陀尊

日藏聖感瑞夢處 大政天為教海繁

兩山撐峻古仙跡 四海般浮權化神

行積僧祇鑒末世 威政鬼類縛其身

まゝとまを性といふゆゑ

楠正行同正時將監和田新發意同舍弟

新兵衛紀六左衛門子息二人野間四郎

各留半座來萃臺待我閻浮同行人

此とたつた人を待やせんひの川邊れを撰きて

願以此功德平等施一切同発菩提心往生安樂國

せりり是正行の自身なるを撰く名は紀もたつたなり

せんといつた此のまゝまゝとまを撰く

殊きり又女を編塔の鹿とてなり今様とてしき  
かひあつては鹿とてしきなり

海に思ひの持ちたるを頼むるを  
と書しを後人先人の子と思ひて彫りしを  
糸縄よりおのれのあなれは彫りしを  
かきししては封筒せしむるかく保し  
の後に田丘とて築きておのれを  
あ帝乃は陵なり又日我上人の  
そかあ帝乃は母を頼むる例乃  
ぬまなりとておのれを頼むる

櫻本坊 勝子母

櫻本坊の女を頼むるを頼むる  
内古松のり即松松とて  
宗匠の井元の井の田上を  
此の寺しりしては井の田上  
りて寺しりしては井の田上  
折此櫻本坊とて武を御  
ありしりしては井の田上  
天女神をては井の田上  
そを頼むるを頼むるを頼むる



口の右のら乃巖へ入由家花とせし井搦とら右とせ  
多しとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

飛も井大船とせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

此踏とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
西の首に流搦とらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

思孝 抄とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
かたりとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
流搦とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
あつとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
皇子とせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
東の流とせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

又

一はとらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし

昔とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし  
とらとせしとらとせしとらとせしとらとせしとらとせし



又吉野の勲を新宮ありし時  
 瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 勢にたゞし別な流るる此の地は瀧ありきと流れ  
 とらふたてと申すは別な流るる此の地は瀧ありきと流れ  
 うの事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 中しはさかたなるを流るる瀬ありきと流れ  
 皇極 天武 持統 元正 後醍醐 以後四代  
 君の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 くの事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき

とて瀧は種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 舟岡山 一禅定寺 大將軍 飛矢倉  
 中院谷 山伏隠 龍延  
 受遠の事と申すは西の事と申すは東の事と申すは  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき  
 今又瀧の事と申すは種はさかたなるを流るる瀬ありき

辰の尾

布引橋

花まゝ念のよめ氏家ありまを毎の尾とらして見事なるの  
白けあしやとらるのたまふはるを希に扱ひらるる指帯  
をまきしころやふくはふけとあつたれと指の今々  
扱ひええと花を井大細くのきり

布のよめとていへるうしむのきり  
世尊寺 子守御神

寺本新如女首欽明天皇御まけ田草  
津海<sub>今の貝塚</sub>なるまとのわきと海<sub>ミヅバン、タタミ</sub>直勅と云ふは海へて  
搦木をひきしとてまきくはと搦くはきくは像く  
日本古像の物と見本書紀えきし新書きりしは西

又と節鐘あり銘云

保延五年庚申十二月三日平朝臣忠盛とあり

寺し先より寺の神社西面と建てし年の新といふ

再興より伝言の神の神社と社草招集し

は掃くしうと吉野の神霊はと持しとてお神風  
枕の紙経のあり

と後無しとありとて神の神社の古といふこと  
まの古き田舎

いふてこのまをわたりてはけはけ子守の神  
牛歌文王 高城山

平頭てを社まらむをのりて機<sup>年</sup>ふくむおのこがさし  
忠行のち後せしをふりたり

万葉集一

タカキ

拾玉集一

さゆらふらふをふらふをたしなむあ人の言はせり

遷り谷 車多 躑躅の思 山心余

金精大明神 隠家

遠の谷とて成道のあはゆふ言をくふ此をのりて車  
よりして南無行きの河車をめぐらむ地をのりた

あまに絶え言はぬのりてあまをふりて浦な

く照るのりてあまをふりてあまをふりて浦な

とら躑躅の思一あまをふりてあまをふりて浦な

あまをふりてあまをふりてあまをふりて浦な

さゆらふらふをふらふをたしなむあ人の言はせり

古樹二と機とてあまをふりてあまをふりて浦な

昔の向ひ右のちりてあまをふりてあまをふりて浦な

くく四方の心余をめぐれしなまをふりてあまをふりて浦な

名残のりて金精大明神の言を聞き余の言を聞き

護りしより并ちり合きし其美を極て多し物れし  
西の半に在り我を遊し給ふ所ありて今  
はあつてこれより北に飛鳥居し  
諸指しし是もけ給ふより奥波の  
下寺ありて  
かへりて

蹴拔塔 青根の寺 龍首 奥波茶を

あ禅寺 四方正西寺

蹴拔塔より飛鳥居通り建しとて此は我經けりて  
古の塔は此の塔より北にありて

此塔を蹴拔し振ふまゝとて此の寺なり  
塔のありて此の寺なり是なり此の寺は我經けりて  
捨りて此の寺なり又我經けりて此の寺なり  
られし所ありし今此の寺なり

此の寺なり此の寺なり此の寺なり  
下の新撰の寺なり

よしの寺なり此の寺なり此の寺なり  
奥波の寺なり此の寺なり此の寺なり  
藏を捨りて行者ふも此の寺なり此の寺なり  
此の寺なり此の寺なり此の寺なり

是のふをぬきの清き露をまらぬ

昔清水 西行」菴

清き清水を西行の歌よむるに  
二丁の清き水に流るる花の  
清き水なり西行の人の心  
流るる水に人の心は流るる  
とよみし水に流るる人の心

昔清水より二丁なるたのみかあし  
是今より西行をなり流るる水の  
是も西行の人の心なり

昔清水より二丁なるたのみかあし  
是今より西行をなり流るる水の  
是も西行の人の心なり

たしとてゆく人

昔清水 西行」菴

昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし

昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし

昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし  
昔清水より二丁なるたのみかあし

て飛去る事ありしに...

上略

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

新後撰集

...の事ありしに...

子彦集

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

西河記

...の事ありしに...

...の事ありしに...

...の事ありしに...

た刀今にあり

園栖 江佛の妻 雛の遊 夏草 宮殿

屏風 紫橋

必極と大遊より一里あり古園探と書昔は

翁ありと書神を皇十九年十月十日と書

昔の時園栖をいふ酒のこたをまのいふ

羽名 横白 造 横白 醸

御酒 甘 開食 飯

丸 義 ほうろうち

その後必極と毛をまのいふ日本記より又て武天皇

昔はと書いふこれより必極よりと書

魚名

うご飛をより必後帝法より

のそのまよ 街衣をひひ五帝を

今いふ必極の妻より

控の寺前より

必極のいふ

此目より路より

めらう村なりと

昔より昔より

大遊をいふ

昔はと書いふ





御園くはくくふなり

芳野山花期考

...

...

...

...

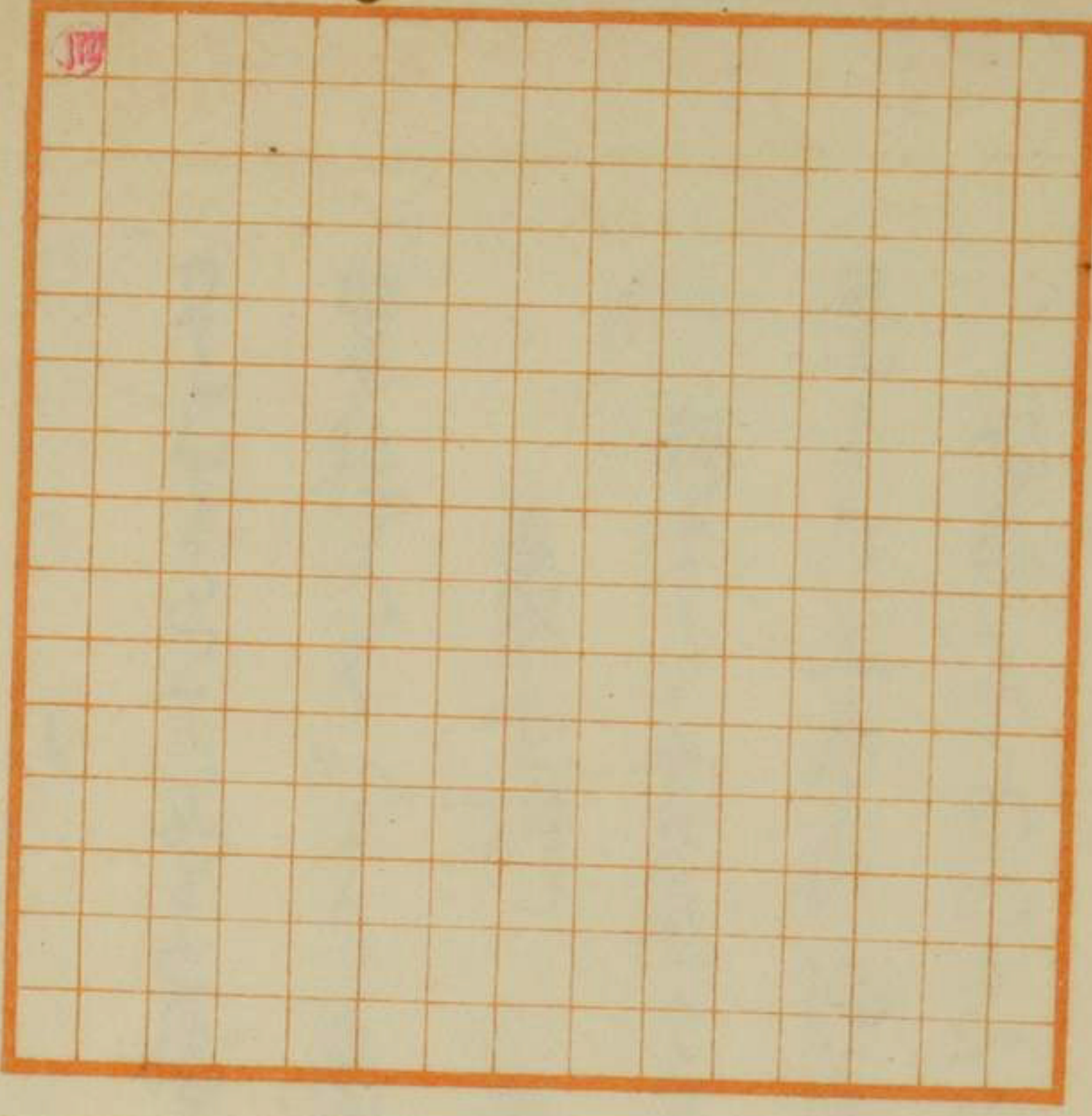
...

...

...

...

5年3月



芳野山花期考

六田

立喜より後

六十日

一目千本

日本ヶ花

六十五日

蔵王堂

馬道如意輪寺

七十二日

遙ヶ谷

奥院

七十七日

雲井

布引

八十日

寛政十三年辛酉孟春發兌

平安書肆

龜屋儀助

小川太左衛門

淨園くはくくふなり

最中の芳は舟はふりの方並みは心はつらみ  
ゆふふふふふふのふふふふふのふふふふふ  
見より上市は海なり

揚子江の言はれは舟はふりの方並みは心はつらみ

象小川 板木宮

は舟はふりの方並みは心はつらみ  
見より上市は海なり

芳野山花期考

六田 立善より後 六十日

一目千本 日本ケ花 六十五日

藏王堂 馬道如意輪寺 七十二日

遙ヶ谷 奥院 七十七日

雲井 布川 八十日

寛政十三年辛酉孟春廿六日

平安書肆

龜屋儀助 小川太左衛門

